

島のむんがたり

遺跡から発見される動物の骨や貝から分かること

遺跡の発掘調査を行うと、土器や陶磁器、石器、貝製品などの「モノ」が発見されます。それら「モノ」の中には、貝殻や動物の骨、植物の種子が炭化したものが見つかることがあり、これらから当時生活していた人々の食糧や遺跡周辺の自然環境が分かります。

これまで徳之島島内の遺跡から出てきた貝殻や動物の骨、植物の種子などを調べて分かったことは、まず1つ目に遺跡から発見される魚の骨や貝殻は今のもの比べて大きいことです。魚の骨については2倍ほど大きさが異なるようです。これは、昭和30年代に伊仙町にある面縄貝塚の発掘によって出てきた魚骨を、その当時に面



現在のマキガイ

遺跡発見のマキガイ

縄集落の漁師さんが獲った魚を標本にし、比較したことで分かりました。また、

貝の大きさですが、遺跡から発見されるマキガイと現在海岸に落ちているものを比べると1^{程度}ほど小さいことがわかっています。

2つ目は、アマミノクロウサギを食料として捕まえて食べていたことです。伊仙町の面縄貝塚や犬田布貝塚、ヨロキ洞穴、天城町の下原（したばる）洞穴遺跡では、発掘調査の結果、リュウキュウイノシシや魚の骨とともにアマミノクロウサギの骨が発見されています。また、アマミノクロウサギが文字記録に初めて登場するのは、幕末の薩摩藩武士名越佐源太（なごやさげんた）が記した『南島雑話』です。その中で、アマミノクロウサギの特徴について、耳が短くて本土のウサギとやや異なり、猫に似ている。朽木に穴を掘る。味は本土のウサギと同じかやや味が薄いともいわれている、と記しています。味に関してはわかりませんが、耳が小さく、穴を掘るといふのは、アマミノクロウサギの特徴そのものです。160年以上前の人達もアマミノクロウサギを



【南島雑話のアマミノクロウサギ】

よく観察しています。

徳之島は、奄美大島、沖縄島北部と西表島ともに7月26日に世界自然遺産へ登録となりました。だが、平成29年3月に国立公園に指定された際に千年以上にわたり人間と自然が深く調和していたことが評価され、日本で唯一の「環境文化型国立公園」となっています。遺跡から発見される貝や動物骨を調べた結果から、三万年前から徳之島に人間が住み始め、生活様式の変化や人口の増減もありながら、特定の動物や貝類などが絶滅していないことから、自然と調和して生活していた様子がうかがえます。しかし、魚の骨や貝の大きさが遺跡から発見するものより小さくなっているということは、自然と「完全に」調和をして生活することがいかに難しいかを示しているのかもしれない。

【郷土資料館 大屋匡史】

問 郷土資料館

☎ 0997-82-2908